

第3回 「泉大津市オリアム随筆賞」

【佳作】

心を編み込んで

末吉美恵子・福岡県

母亡き後、遺品を整理していると、見覚えのある物を見つけた。母のショールである。それは、入院中の母のために、不器用な私が鉤針で懸命に編んだ物だった。きれいに畳んで、防虫剤と一緒にビニールに入れ、タンスの中にしまわれていた。

懐かしさで、胸がいつぱいになった。

母は、いろいろな病を抱え込んで、何度も入退院を繰り返していた。頭部にガンの病巣が見つかったのは、最後の入院となる平成十七年のことだった。手術のために、母は頭を剃られた。おしゃれだった母の坊主頭が悲しくて、私は一念発起して毛糸の帽子を編んだ。母の好きな深緑色の毛糸を使い、編み方本と首っぴきで編んだ。不格好だったが、母は喜んでくれた。季節は二月。まだまだ寒さの最中だった。身も心も寒い母のために、私が出来ることは他になかった。せめて心なりとも温かくなって欲しくて、同じ色の毛糸で、大判のショールも編むことにした。母には、

「退院の日に間に合わせるからね！」

と宣言した。だが本当は、完治して退院ということは、あり得なかった。余命に気付いていたのかもしれない母は、静かにほほえんで言った。

「楽しみに待つとるよ」

中細の毛糸を使い、鉤針で編むショールという大作。不器用な私にとっては、先の見えない挑戦だった。母が待っている。そのことだけを胸に、来る日も来る日も鉤針を手にした。母の好きな深緑色をベースに、ベージュとグレーの三色の縞模様を入れた、八段一模様である。その複雑さに悪戦苦闘した。編み目を間違えてはほぐし、目が緩すぎてはほぐす。そして又編む、のくり返し。ようやく一模様が完成すると、母の病気への希望も見えてくるような気がした。母も闘っている。とにかく頑張らなくては。だが、幅広のショールは、なかなか形を現さなかった。

やみくもに編んでいく途中、ふと気付いた。夫に手伝って貰い、柿から玉状に巻いた毛糸が、いつの間にか小さくなっていった。メインの深緑色。これだけあれば足りるだろう。もし足りなくなれば、又買えばいい。と、とりあえずお店にあった分を買って占めてあった。だが、それまでに編めたショールの長さは、母の体を覆うには、まだまだ足りなかった。

いよいよ毛糸玉は小さくなってきた。私は慌てて、件の手芸店へ買い足しに走った。ところが品切れだった。しかも、本店の方にも在庫はないという。二月という春に向かうこ

の時期、メーカーの方ももう製造はしないのだとか。絶望的な気持ちになった。せっかく必死でここまで編んだのに、別の色を加えると、バランスが悪くなる。どうせなら、おしやれな母の好みの色で、センスよく仕上げたいのに。だが、いかんせん、物が無いのだ。「いろいろな店に、当たってみましょう」と言ってくれる、店員さんの言葉を頼みに、ひたすら待つしかなかった。

一週間が過ぎたが、何の連絡もなかった。ついに毛糸が尽きた。待ちわびている母を思い、焦った。「申し訳ないが、あの言葉は店員さんの社交辞令だったのかも…」と、別の色を継ぎ足そうと、心の区切りをつけた。ところが正しくその日、突然、電話が鳴った。

「宮崎で見つかりましたよ、良かったですね」と、弾んだ声の主は、手芸店の店員さんだった。忘れていたわけではなかったのだ。胸がじーんとした。何と、毛糸メーカーの方が、深緑色の毛糸の納品先すべてに、在庫の有無をずっと問い合わせて下さっていたのだ、という。北は北海道から、南は沖縄まで。そして、ついに見つかったのだ。望む色の毛糸が見つかったことは、何よりも嬉しい。加えてたった四棒の毛糸の注文でも、お客のニーズに真摯に応えようとして下さった人の優しさに、胸が熱くなった。

二日後に届いた大切な毛糸は、夫と二人で丁寧にほぐして、玉にした。たくさん人の心を一緒に編み込んで、シヨールは無事に出来上がった。

だが春になっても、退院は叶わなかった。

私の編んだ帽子をかぶり、私の編んだシヨールにくるまり、嬉しそうにほほえむ母。私の携帯に収めてある。病院の看護師さんから「可愛い」とほめられた、母の姿である。

「娘が編んでくれたんですよ」と自慢する母の声が、今にも聞こえてきそうな気がする。

母は、夏に一度シヨールを家に持ち帰り、ダンスの中に大切にしまったのだろう。再びの冬に、シヨールが、寝たきりの母を温かく包むことは、もうなかった。十二月半ば、母は八十八才で逝ってしまった。たくさんの人々の優しさと、娘の必死の祈りを編み込んだシヨールを残して。

私の元にもどってきた母のシヨールは、今私の肩に。写真を前に母との思い出に浸る私を、温かく包み込んでくれている。